

親株の本ぼベッド定植によるイチゴの省力育苗技術			
<p>[要約] <u>少量土壌培地耕の本ぼベッドにイチゴの親株を定植し、発生したランナーを切り離さず、8月中旬に直接定植することで、育苗の省力化が図れ、セル成型苗と同等の収量が得られる。親株の定植は6月末、施肥量は窒素成分で400mg/株程度が適する。</u></p>			
農業試験場 栽培部 野菜担当		[実施機関] 平成13年度～15年度	
[部会] 農産	[分野] 高品質化技術	[予算区分] 県単	[成果分類] 普及

[背景・ねらい]

本県では少量土壌培地耕を利用したイチゴの高設栽培が普及し、収穫・管理作業の省力化が図られている。しかし、育苗については露地無仮植育苗や空中採苗法では省力面で課題が残り、近年、県内で普及しているモミガラ育苗では別施設が必要となる。そこで、育苗の省力化と本ぼハウスの有効利用を図るため、本ぼベッドを利用した育苗技術について検討する。

[成果の内容・特徴]

本ぼベッドに定植した親株から発生したランナーを下垂させ、必要苗数が確保できた時点で本ぼベッドにランナーを切り離さずに定植する。子苗の活着後にランナーを切り離すことで、育苗管理の省力化が図れ、慣行のセル育苗と同等の収量が得られる(図1、2)。

親株の定植時期を6月25日、7月1日、7月10日としたところ、収量は各区でほとんど差は認められないが、定植時期が早いほど子苗が早く確保でき、頂花房、1次腋花房の出らも早い(データ省略)。

親株への施肥量は、窒素成分200mg/株で1次腋花房の出らいが早く、総収量は最も多いが、上物収量や1果重は400mg/株が優れた(表1)。

子苗の定植時期を8月10日、8月20日、8月30日としたところ、8月20日定植で最も収量が高い(図3)。また、子苗への花芽分化前の施肥は頂花房、1次腋花房の出らいが遅れ、初期収量が低くなることから、子苗への施肥は必要ないと考えられる(図4)。

[成果の活用面・留意点]

親株1株あたりの目標採苗数は10株程度とし、親株の株間は1mとする。

親株への施肥には緩効性肥料を用いる。また、排液の窒素成分が子苗の花芽分化に影響しないよう水のみをかけ流しで給水する。花芽分化確認後は大塚OK-F-1(EC0.45～0.6dS/m)を循環施用する。

子苗の定植時期は高温期となるので、ハウスの遮光が必要である。また、本ぼでの栽培期間が長くなるため病害虫防除には留意する必要がある。

[具体的データ]

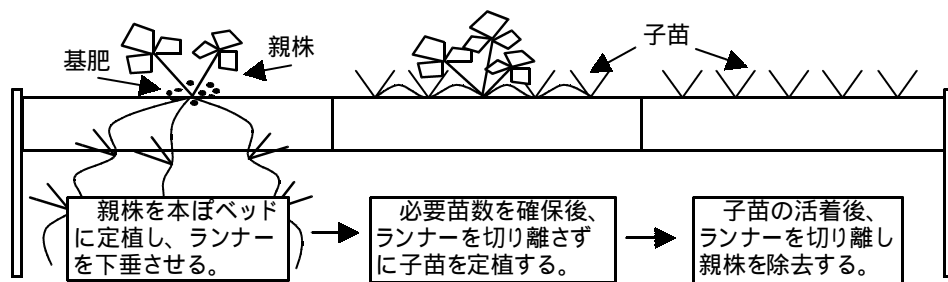


図1 本ほベッドを利用したイチゴ苗の直接定植の概要

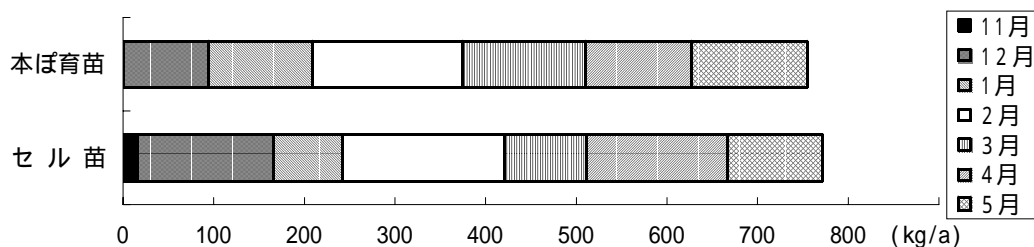


図2 本ほ育苗とセル成型苗育苗の総収量比較(2002年、供試品種：‘章姫’)

表1 親株への施肥量が出らにおよび収量に及ぼす影響(2003年)

試験区	出ら率の推移(%)						総収量		上物収量 ¹⁾		上物率 (%)
	頂花房			1次腋花房			(kg/a)	(g/個)	(kg/a)	(g/個)	
	10/5	10/14	10/31	10/31	11/15	12/12					
200mg	0	56	100	32	64	96	659	17.6	579	21.0	89.8
400mg	4	58	100	8	46	89	647	20.4	600	22.4	92.7
600mg	0	52	92	4	46	92	616	19.6	550	22.3	89.3

注) ¹⁾ 8g以上の可販果収量。供試品種：‘章姫’ 親株への施肥にはIB化成を用いた。

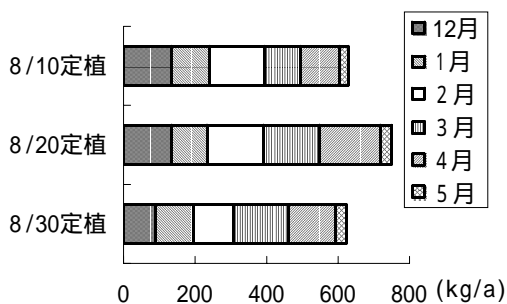


図3 子苗の定植時期が総収量に及ぼす影響 (2004年、供試品種：‘章姫’)

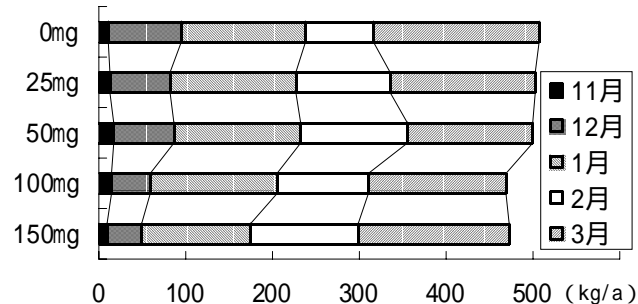


図4 子苗への施肥量が総収量に及ぼす影響 (2003年) 供試品種‘章姫’。

[その他]

・研究課題名

大課題名：消費者等の多様なニーズに応える高品質・高付加価値化技術の開発
 中課題名：安全・安心・高品質な農畜産物の生産技術の開発

・研究担当者名

高澤卓弥 (H16)、中村嘉孝(H13、14、15：湖北地域農業改良普及センター)

・その他特記事項

発表論文等：高澤・中村・谿(2004)園芸学会近畿支部要旨：11